

性に埋没している自己から解き放たれ、『平面に横ばひ』していた意識は、垂直に現在に交叉するのであると。『役者ばかりではない。人間存在そのものが、すでに二重性をもつてゐるのだ。人間はただ生きることを欲してゐるのではない。(中略)ひとは生きる。同時にそれを味はふこと、それを欲してゐる。』のだと。ただ日常生活では、それはなかなかまなぬと。しかし、であるからこそ、そうした『生の全体的充実感(劇的時間)、別な言葉で言えば儀式、祭祀』を、生活のリズムとしても、取り入れておかないと、漫然とした時間の流れの中で、人間は疲れてしまうという意味合いの事を『人間・この劇的なもの』の最終章で述べている。それはさておき]

◎演戯者には、すべては見へない。過去と未来とから切り放たれた現在だけが、過去・現在・未来といふ全体の象徴として存在してゐるだけだ。前後に暗黒があればこそ、その間の時間を光として感じることができる。その前後には暗黒の淵に埋没してしまへばこそ、その間の一瞬に浮びあがることのできるのだ。意識は過去・現代・未来の全体を眺めわたせる地位にありながら、しかも限られた枠のなかだけしか見ようとしなから、その間の時間の経過を強烈に味はうことができるのだ。

〔すなわち『演戯者』を『演武者』として、もう一度読んでいただければよい。日常性をも、演じ来たった本数をも含めて、過去を、そしてこれから演ずる未来の本数を、その両方を、『前後を暗黒化』し、意識を現在に垂直に交叉せしめることができた時、はじめて『その間の時間を光として感じ』『その間の経過を強烈に味はふことができる』のであると。過去・現在・未来で『全体』という時間上の全体感を、すなわち前述の、生が必然性のうちにあるという充実感『生の全体感、実在感』を獲得できるのであると。さて我々は『演戯者』に匹敵するほどに『演武者』たり得ていようか。年の瀬の恒例の『遍稽古』においてはいかがか。〕

◎自分が部分としてとどまつてゐてこそ、はじめて全体が偲ばれる。私たちは全体を見ると同時に、部分としての限界を守らなければならない。あるいは、部分を部分として明確にとらへることによつて、そのなかに全体を実感しなければならない。

◎私たちが個人の全体性を恢復する唯一の道は、自分が部分にすぎぬことを覚悟し、意識的に部分としての自己を味はいつくすこと。その味はひの過程において、全体感が象徴的に甦る。よくいはれる自我の確立といふのは、さういふことだ。

〔『部分』とは、前後を暗黒化して、光として浮かび上がった現在、即ち役者における『せりふと動き』。演武者における現在の型の所作のことでもある。〕

〔此々の文章には、そして著書全体においても、近代・現代の命題である『個人主義の限界と超克』という問題が示唆されているように私には思えるのである。では、どのようにしたら部分(現在)を明確にとらえることができるか。前後を暗黒化し、意識を垂直に現在に交叉させるには、どのような様式・方法論によってそれが可能か。〕

〔以下、その様式・方法論的文章を、著書『せりふと動き』より抜粋致します。〕

◎役者としての心得の第一は、自分のせりふを機械的に早く覚えてしまい、次にはその自分のせりふの切掛けになる相手のせりふまですつかり覚えてしまふ事。その後で自他のせりふを離れた様に自由になり〔『全体を知つていながら知らぬふり』と同じ意か。〕相手のせりふが毎晩舞台の上で一つ一つ初めて聴く言葉の様に新鮮に聞こえてき、自分のせりふもそれに応じて初めて口に出てきた様に新鮮に喋れるようになることです。〔前述、私見の方法論、数息観「ひとつ」「無一」による「意識の能動的暗黒化」の項を参照。〕

◎歌舞伎の型、様式美は写実から出たものであり、(中略)写実から離れず、しかも型にまで昇華せねばならぬといふ点に、型の難しさがあり、下手をすれば実のない空疎な類型に堕して